炎帝と処女王

陳　冰冰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
炎帝と処女王

【Ｎコード】
Ｎ２５８９Ｗ

【作者名】
陳　冰冰

【あらすじ】
戦利品の女は王太子の娘を産み寵妃の階位を得る。程なく高齢の正妃に奇跡の男子が生まれた。しかしその顔には呪炎の痣があった。

夏季悲？（夏の憂い）

マァガレがここに来て、二度目の夏（シャァ）の季節が訪れようとしていた。

数年に一度咲くという、笹（シャオ）の花が米粒のように沢山ぶら下がっている。湿度が高く不快な夏も、この青々と茂る竹林を通った風なら涼しかろうと、国王の瞿孟海（ク・マンホイ）が王太子が生まれた年に城の周りに植えさせたのだ。

深緑に淀んだ堀と高い城壁に囲まれた猛虎城（モウコジョウ）は、南北に走る中央軸にはヌクヘ（緑）の村から取り寄せた翡翠色の石を敷き詰め、四面に門を、四つ隅に主要楼を据えてある。

猛虎城は全て左右対称に作られており、南には女王と王太子妃ルビが住む紫華楼（シカロウ）。北には側室や愛妾達が住む、朱華楼（シュカロウ）があった。彼女達は戦の度に戦利品として各国から略奪された、哀れな女達だった。その中に、マァガレもいた。

東には王と王子達が住む猛海殿、そして西には戦士達が住む武雄殿（ブユウデン）があった。これら四つが主要楼だ。その他にも神殿や、式典などが行われる和親殿（ワシンデン）など、部屋数で言うなら一万近く。侍女、使用人、戦士を含め十万人近くが住んでいると言えば、その広さは想像つくだろうか。

早朝、まだ辺りが薄暗い頃だった。マァガレは、突き刺さるような鋭い悲鳴で目が覚めた。はっと、上体を起こすと、気配に気付いた侍女のタウム（明）が、寝台の傍に跪（カシズ）く。最近、我山族から略奪された、まだ幼い少女だ。しかしその幼さの中にも、確かな美しさの欠片が埋まっている。タウムを略奪した戦士は開花を待って、それを無惨に摘み取る気なのだろうか。そのことを思うとを堪らなくなって、マァガレはタウムを自分の庇護下に置くことにしたのだった。

「――ルビ王太子妃の、お声がしたようですが」
「マァガレ様、赤ん坊が生まれるんですよ。海生（ハイサン）様のような可愛い女の子だと良いですね」
「そうね……」

タウムの嬉しそうな顔につられて、思わずマァガレも微笑んだ。両親を目の前で殺され、銀食器や毛皮と同じ物のように略奪された身でも、タウムは明るく一生懸命に働いている。

「マァガレ様、どうかなさったのですか？」
「いいえ、大丈夫」

そう答えたものの――。不安が鳩尾辺りから迫り上がって来るのを、マァガレは止めることができないでいた。そのまま眠りにつくこともできず、床に着く程の黒髪を靡かせて起きあがる。タウムがすかさず、朱色の猛虎服を翻して傅いた。

「まだ、着替えはいいわ」

マァガレは小さく丸い窓の傍に眠る、海生の寝顔を見下ろした。海生の寝台の上には金色の飾りが垂れており、窓から入る風でシャラシャラと鳴り光る。外界の様子が分かるのは、この小さな窓だけ。

マァガレは幼い娘を抱き上げると、そっと扉を開ける。そこからは剣のように尖った我山（ガザン）が、天に向かって伸びていた。

マァガレは、あの雪深い山で育った。しかし夫を持って直ぐの年に、猛虎国の襲撃を受け、戦利品として略奪されたのだ。

まだ幼さの残る夫と家族を、目の前で殺された。しかしなにより辛かったのは、敵である王太子の愛妾になったことだ。我山族の特徴である、漆黒の髪と青白く透き通るように白い肌。切れ長の涼し

げな瞳と、完璧な鼻を持つ美しいマァガレが、王太子の雷震（レイジェイ）の目に留まらない訳がなかった。

「――寒煙迷離（ハンヤンミリィ）」

マァガレの立ち姿は、廃墟と化した敗戦国の城にかかる靄のように、儚く美しく。そして切ない。見ている者の胸を、締め付けるようだ。そう雷震が語ってから、「靄（マァガレ）」と呼ばれるようになった。猛虎語で靄は「アイ」と読むが、我山語では「マァガレ」と言う為、その名が定着した。

大国トルク国将軍の娘であるルビは、気性が荒く誇り高い。トルク人特有の浅黒い肌と高い頬骨、くすんだ緑の瞳と黄金の髪を持つ華やかな美女だ。しかし従順な猛虎の女に慣れている雷震とは、ずっと不仲が続いていた。そのこともあって、マァガレの壊れやすい美しさに、雷震は心を奪われた。

程なくしてマァガレが雷震の子を産むと、マァガレは靄妃（アイフェイ）と呼ばれ、寵妃としては最高階位が与えられた。ルビは子供を産む年齢はとうに過ぎているし、海生が唯一の跡取りだ。城の者はマァガレがそのうち母妃となり、階位が更に上がるだろうと噂しあった。

雷震の弟、第二王太子の海龍（ハイロン）は生まれつき体が弱く、殆どを寝台の上で生活していた。とっくに后を迎えても良い年になっているのに、猛海殿に籠もってばかりいた。マァガレも海龍に会ったのは、一度きり。海生が誕生した日だけだった。

「おめでとうございます。靄妃」

海龍は侍女達に支えられながら、マァガレが横たわる寝台の横で膝を折った。そして一人では立ち上がれず、醜態を晒したことを恥じるように悲しげに睫を震わせる。

「ありがとうございます。海龍王太子」

すると海龍は、マァガレの耳に薄い唇を近付けて小さく囁いた。

「辛いこともおありかと思うが、どうか養生してください」

マァガレに優しい言葉をかけてくれたのは、この広い城の中で海龍だけだった。海龍には雷震にはない、王の品格があった。

海龍は荒い息の合間にそれだけ告げると、海生の小さく握った拳に慎重に触れた。青白い頬が、微かに緩む。父である雷震より、嬉しそう。マァガレはそう思った。

ルビの悲鳴の間隔が、段々と狭くなって来ていた。しかし……、ルビが子を産むと、海生の運命はどうなるのか。マァガレは溜息を吐いて、海生を抱きしめた。

壮？的？？（華やかな牢獄）

「マァガレ！」

雷震の声が、朱華楼に響いた。侍女達は驚き、急いで部屋の隅に引き下がり傅く。ルビが出産中であるのに、寵妃の部屋に来るとは。もしルビが知ったら、大変なことになる。侍女達は互いに顔を見合わせ、困った顔で肩を竦めた。

爽やかな風も太陽の光も入らぬ薄暗い中に、蝋燭を中に入れた天燈が幾つも浮かぶ。侍女達に磨き上げられ黒光りした床に、天井から朱色の絹（ジュアン）の帳が幾重にも垂れ下がっていた。雷震がそれを一枚一枚たくし上げながら、必死でマァガレの姿を探すのを、侍女達は微笑ましく眺めた。あの王太子にも、こんなに可愛らしい一面があるのかと。

雷震は透けるほど薄い朱赤の絹衣を素肌に巻き付け、足音を響かせながらマァガレの名を呼ぶ。その姿を見て、侍女達は湯の支度を始めた。侍女達の予想通り、衣を脱ぎ捨てた雷震が、腰布だけの姿でマァガレの元に現れた。猛虎の男らしい、小柄ながら堅い筋肉に覆われた体。背中に垂らした髪の間から、先日の戦で負った刀傷が見えた。マァガレは恐ろしくなって、静かにそれから視線を逸らす。

「雷震様、まだこのような格好で。申し訳ありません」

「まぁ、いい。ルビの死にそうな悲鳴が耳について、眠れないんだ。それにこの蒸し暑さ。この部屋が一番涼しいからな。一緒に、湯にでも浸かろうではないか」

侍女達は予想が当たったことに笑い合い、小走りで湯に入れる蘭の花を摘みに行った。

「ルビ様のお傍にいなくても宜しいのですか？初めての出産で、心細いでしょうに」

それを聞くと、雷震はなんとも嫌そうな顔で肩を竦めた。

「お前の倍の年で、初めての出産だ。女の執念というのは恐ろしいな。ルビはお前への対抗心だけで、孕んだのだ。執念の子供がどんな顔をして生まれてくるか、俺は恐ろしいのだよ」

雷震が娘の海生を抱き、その柔らかく白い頬に髭面を擦りつける姿を見ながらマァガレは考えた。このような夏を何度繰り返せば、この男から解放されるのだろうかと。

海生はその乱暴な抱き方に身を捩り、力の限りの泣き声を上げた。すると雷震は途端に不機嫌になり、侍女達を呼びつけて海生を押しつける。

「雷震様、赤子は泣くのが仕事なのですよ」

「お前と同じで、俺に反抗的なんだよ」

「私は雷震様に、逆らったことはございません」

「俺は、お前の身だけではなく、心も欲しいのだ」

雷震はマァガレの前では、自分の欲望を口にせねばならなかった。他の場所では、自分が眉一つ動かすだけで、侍女達が甲斐甲斐しく世話をしてくれる。猛虎国の王太子の目に留まり、いつか寵妃の座を得るのだと虎視眈々と狙ってる。そのような狡猾な視線の女を、雷震は心底嫌っていた。

「雷震様、貴方様は私の夫を、父を、兄弟達を殺したのですよ。そんな貴方様に、何故私の全てを差し出せましょう」

雷震はマァガレの声が、好きだった。城の者は抑揚がない冷たい声だと言うが、雷震はそうは思わなかった。以前、猛虎国奥地の鍾乳洞を散策したおり、地下水が天井から洞床に落ちる音を聞いたことがある。雷震はお付きの者達を黙らせ、その音に暫く耳を傾けた。たった一つの小さな滴が、鍾乳洞の中の空気を遠くの方まで揺らす。マァガレの声は、それを連想させる。

「まぁ、良い」

雷震はマァガレの手を引き、浴室に向かった。

五つの花びらを模った浴槽は、ヌクへの村から取り寄せた翡翠色の石を敷き詰めてある。

寵妃の浴室に勿体ないとルビが顔を顰めたが、雷震は意に介さなかった。この翡翠色の石には傷を癒す力があり、武雄殿の浴槽にも幾つか沈めてある。

湯船には朱色の蘭が浮かび、濃厚な甘い匂いを漂わせていた。雷震は豪快に飛び込み、マァガレが、白い夜着の帯びを解くのを眺めた。長い髪を頭の上に纏めると、夜着は足元に柔らかく落ちる。湯気の中にいるマァガレは、今にも消えてなくなりそうだ。雷震は不安になって浴槽から手を伸ばし、その細い足首に指を這わせる。

「お前を見ていると、なんだか不安になるよ。いつの日か、この湯気のように蒸発してなくなってしまうのではないかと」

マァガレが少しだけ微笑み、湯の中に体を沈める。蘭の花を掻き分け雷震の傍に行き、香木（シャンルー）で出来た櫛をその髪にあてた。

「お前はいつの日か、私を愛してくれるのか」

「望みが二つだけあります。それを叶えてくださったら、きっとこの心も貴方様に捧げましょう」

?妃焦?（マァガレ不安になる）

やっと、マァガレが折れた。俺に傅かぬ女などいないのだ。髪を梳かれる心地よさに目を閉じていた雷震は、思わず緩む口元を引き締めた。

「言ってみよ。俺は猛虎国、第一王太子だ。何でも叶えてやる。宝石か？着物か？それとも、城か？」

雷震は上機嫌で、蘭の香りのするマァガレの首筋に口吻した。

「一つ、戦で負けた国の女を、略奪するのは止めてください」

雷震が口を開きかけるのを、ひんやりと冷たい指が制した。我山の女の体は、湯に浸かっても決して温まることはない。

「女は、物ではありません」

「――良かろう」

蘭と湯を掻いて逃げるマァガレを追いながら、雷震は唸るように言った。

「猛虎国の兵達全員に、徹底させてくださいますね？」

「分かった。約束しよう。で、二つ目はなんだ？」

細い腕を掴み引き寄せて、乱暴にマァガレを抱きしめた。細い体に不釣り合いな豊かな胸に顔を埋め、マァガレの規則正しい鼓動を確認する。決して乱れないその音を聞くと、雷震は言いようのない苛立ちを感じた。この女を、自分に平伏させたい。身も心も。今直ぐにだ。

「――痛い」

細い腰を締つける腕に、マァガレが悲鳴を上げる。戦の度に傷が増える逞しい腕が、おぞましい。思わず突き放すと、雷震の行き場を無くした手が蘭を握り潰した。

「もういい！」

雷震はいつものように癇癪を起こして、飛沫を上げて湯から上がる。それは雷震が、摺り玻璃（ガラス）の向こうに控える侍女を呼ぼうと、大きく口を開きかけた時だった。

「王太子様、赤ちゃんが生まれました！男の子ですよ！」

それより早く、タウムの興奮した甲高い声がした。梅の細工が施された玻璃の向こうで、小さな体が飛び跳ねているのが見える。

「そうかっ」

あれほど、ルビ王太子妃に子が生まれるのを嫌がっていたというのに……。苦々しい想いでマァガレも湯から上がり、急いで雷震の背後から衣を羽織らせた。それは黒字に襟の部分と膝から裾にかけて、笹と竹の模様が金糸で刺繍をしてあった。これは、マァガレ自ら刺繍した物だ。

「お前の刺繍は、本当に美しいな」

「ありがとうございます」

雷震は途端に機嫌を直して、鏡の前で両手を広げた。その後ろから

腰紐を結びながら、マァガレは手の震えを止めることができなかった。雷震に男の子が生まれた。世継ぎが生まれた！予想していた、最悪の事態になったのだ。

「マァガレ、どうした？具合でも悪いのか」

「いえ雷震様。おめでとうございます。これで、猛虎国も安泰ですね」

「うむ」

そもそもマァガレは、我山族の出だ。霞妃の名を与えられても、蛮族の女と陰口を叩かれていることを知っている。母妃として確固たる地位が欲しかったのだ。海生の為にも。

「笹の花言葉は、ささやかな幸せと聞きました。どうか世継ぎが生まれても、海生のこともお忘れなきように」

そして心の中で呟いた。笹の花言葉はささやかな幸せだが、竹は忍耐だと。

王子出生（王子誕生）

私は、死んでいるのかもしれない。ルビは朦朧とした意識の中で、考えた。手足は重く動かないし、呼吸をするのさえ困難だ。赤子は生まれて直ぐに、太医者達が何処かへ連れていった。赤子がくるまれていた薄紫色の衣だけが、やけに鮮明に瞼の裏に残っている。あれには、睡蓮の花が金糸で刺してあった。靄妃からの贈り物だと、侍女が恭しく差し出したのは数日前だ。

「ご苦労（アハメッサーダ）」

霞んだ視界の先に、雷震の顔があった。「妻のことをより理解したいから、トルク語を勉強した」と、雷震が婚礼の後に言ってくれたことを、ルビは切なく思い出した。そのまま部屋を出て行く雷震の背中には、やはり金糸の刺繍がある。

「今年は、笹の花が咲いたのですよ」

侍女からそう報告を受けて、ルビはその長い指を折った。笹の花は、六年か七年に一度咲くと言う。

「今年で三回目の笹の花……」

三回目で、やっと子供を授かった。しかも、男の子だ。これで、雷震の気持ちを繋ぎ止めることができるだろうか――。

ルビの父は、平民からトルク国の将軍まで上り詰めた。海での戦いを得意とし、猛虎国から奇襲を受けた際も、トルク国への上陸を終ぞ許さなかった。

ルビの父は立派な風采をしていた。広い肩幅と長い手足、背が高いトルク人の中で、いつも頭一つ飛び出していた。金色の口髭と、陽気な翡翠色の瞳。ルビは父の魅力的な特徴を、全て受け継いだ。しかし、猛虎の女達の丸みを帯びた肩や、男の腕の中にすっぽりと収まる華奢な体に囲まれると、ルビは厳つく無骨に見える。ルビは自分を恥じ、縮こまって生活するようになった。

「黙れっ！女に何が分かる」

将軍の娘として育ち、父の傍で兵法を学んだルビは優れた軍師だった。しかし、雷震を初め王や将軍達は、女が戦に口を出すことを嫌った。

認められない苦しさは、ルビをどんどん歪ませていった。決定的なのは、靄妃に子が生まれたことだ。

「あの蛮族の子が、貴方様のお子だと何故分かるのです？」

「嫉妬か？見苦しいぞ」

朱華楼にマァガレを見舞えと迫る雷震に、ルビの怒りは爆発した。猛虎国の王太子が、蛮族の女に骨抜きにされるなんて。しかも正妃である自分に、わざわざ愛妾達が住む汚れた場所に出向けと言う。何という侮辱。

「あの女には、略奪される前に夫がいたのですよ。ここに来て十ヶ月余り。あの女が生んだ子は、前の夫の子供ですよ！」

「女は誰の種を孕んだのか、分かるそうだ。お前にはそんな経験がないから、分からんのだろう？猛虎では女が三年経っても子を産まぬ場合、家から叩き出されても文句は言えんのだぞ。お前はここに来て、何年になる？正妃が世継ぎを生めないから、マァガレが代わり生んでくれたのではないか！労いの言葉くらい、正妃らしくかけ

てやれ！」

それでも言うことを聞かぬルビを、雷震は引き摺るように朱華楼まで連れて行った。狩りで仕留めた獣のようにルビを扱う雷震に、侍女達は恐れ戦き部屋の隅に固まって震えている。

寝台の上に横たわるマァガレは、確かに美しかった。どこもかしこも滑らかで、向こうが透けて見えるような白い肌をしていた。寒煙迷離と、雷震が例えたのも分かる。

「良くやった」

雷震が額に貼り付いた髪を払い、汗を優しく拭ってやる。マァガレの上気した頬や、そのはにかんだ仕草に、雷震が心底惚れ込んでいるのが見て取れた。このような目で、私は見詰められたことがない。

「ルビ王太子妃、こんな姿で失礼を……」

マァガレが起きあがろうとするのを、ルビは正妃の余裕で制した。

「良いのですよ。おめでとう」

ルビは打ちのめされ立っているのがやっとだったが、マァガレの前でそれを見せるのはプライドが許せなかった。

ルビには愛し、愛された男がいた。それはトルク国第二王太子ファリートだ。しかし平民との結婚を、王族が許す訳はなかった。

砂岩を削って作った王の城は砂漠の真ん中にあり、入り口には両側に二隊ずつ、神の像が彫られてた。左から順に、火神と水神、そして正門を挟み、地神と愛の神が膝を折っていた。ルビとファリートは愛の神がお気に入りだった。その神だけは唯一、女性だったか

ら。
　猛虎国へ旅立つ前日、ファリートはルビを愛の神の前に呼び出した。砂漠の夜は冷え込む。冷たい月が二人を照らし、ファリートは凍える息を吐きながらルビの体を抱きしめた。大柄なルビが見上げる程、ファリートは背が高かった。額にいつも、金色の巻き毛が垂れている。まだ少年の面影が残るファリートは、驚くべき大人の決断を告げた。

「一緒に逃げよう」

大きく切れ長の目に見詰められて、ルビは思わず頷きそうになる。
　ファリートの後ろには、ルビアンに引かれた砂上用の橇があった。ファリートの足元に、まだ子供のルビアンがまとわりついている。

「貴方は本当に、変な生き物に好かれるわね」
「猛虎国の商船に卵が乗ってたらしく、それが砂漠の水源地帯で繁殖したんだ」

手足や尾は短く太く、顔は体に釣り合わず長い。そこにはびっしりと、小さな牙が生えていた。灰色の短毛と、頭から背にかけて馬の鬣のように黒い毛が垂れている。どんよりと濁った目と低い鼻を持ち、その顔は「間抜けな男（ルビアン）」に似ている。

「さぁ、私と一緒に逃げよう」
「できません。私がそんなことをすれば、将軍の父や、同じく軍人の兄弟達に迷惑がかかります。父の今までの苦労が……」

あの時、ファリートと逃げていれば、今頃どんな人生を送っていただろう。ルビは掠れ行く意識の中で、遠くで我が子の泣き声を聞いたような気がした。

太医から赤子を受け取った雷震は、思わず言葉を無くした。王は目を見張り、王女は震える指で、その箇所をなぞった。赤子には左のこめかみから頬骨にかけて、赤い、まるで炎のような痣があった。

国王大怒（王激怒す）

猛虎殿の謁見室に入った者は、壁に描かれた虎に圧倒されることだろう。この壁は猛海が王になった年に、塗り替えられた。夜空に浮かぶ月と芍薬（シャオヨー）に潜む三匹の虎が、金褐色の目を光らせて閲覧者を睨み付ける。三匹の虎は勿論、王、猛海と海龍、そして雷震を表している。そして月と花は、王妃の樂帝（ローティ）を表していた。

樂帝は若い頃、閉月羞花（ビーイーシュウフォン）と呼ばれた美女だった。樂帝の美しさに月は恥ずかしがって陰り、花はその花弁を閉じると言うのだ。しかし今では、背負って来た苦労が深い皺となって、樂帝を年齢より老けさせていた。

早朝なのにも関わらず、樂帝は完璧な王妃の姿で雷震を迎えた。猛虎国の高貴な女性が殆どするように、両把頭（額中央から左右に分けた髪型）に結って立たせた髪には芍薬を形取った薄紫の飾りをつけている。立たせた髪の中には板が入っており、その重みで背筋を伸ばし美しい姿勢でいられると信じられていた。

筒状に裁断された旗袍（チーパオ）と呼ばれる猛虎国の民族衣装には、紫の紗に虎の地織りがしてあり、金糸と銀糸を中心として蝶や芍薬の刺繍が入っている。ゆったりとした形は既婚者用で、若い娘なら体の線が出るようにつくられていた。

「何かの病か！？」

猛海殿に響き渡る声で、猛海は太医を詰問した。先ほどまで愛妾に抱かれて眠っていたらしく、朱に桜の花弁が刺繍してある女物の絹衣を羽織っていた。衣からは白粉の匂いが漂い、樂帝は眉間に皺を寄せて白い手絹（ソウジュアン）で鼻を覆っている。

近衛兵二人に両腕を抱えられた格好で連れて来られた太医は、罪人のように床に投げ出された。恐る恐る猛海を見上げるも、顔の大

半を占める濃い髭のせいで表情は読めない。太医は途端に不安になり、必死に弁明した。

「我が君！断じて、違います。痣でございます。王太子には、何の異常もありません！」

「あの年齢で、子供を産むのが無茶だったんですよ。可哀想な子……」

樂帝（ローティ）は哀れな王子を腕に抱き、そっと頬ずりをした。赤い痣を覗けば、雷震にそっくりだ。つまり、猛虎の血がトルクに勝ったということだ。樂帝は内心、ほっとしていた。

「それより問題なのは、ルビ王太子妃です。このままでは、長くないかも知れません」

「どういうことだ？」

猛海は部屋の隅に立てかけてある、槍に目を走らせた。猛海は槍の使い手だ。猛海の機嫌を損ねた者達が、あの槍で何人殺されただろうか。それに気付いた太医は、床に額を擦りつけるようにして、許しを請うた。

「ル、ルビ王太子妃に、私を含めた太医達は進言致しました！この出産は、無茶であると。けれど、王太子妃の命令に私達が逆らうことができましょうか！」

「何故、私に報告しなかったのだ！ルビはトルク国との平和協定の証だ。それを死なせたとあっては、トルク国に顔向けができないではないか！」

猛海が目を見開いて恫喝すると、太医は悲鳴を上げて平伏した。そして、ちらと雷震の顔色を窺った。

「雷震王太子には、申し上げたのですが……。この出産は、ルビ王太子妃のお体が保たないと……」
「息子よ、お前は何と言ったのだ」
雷震は樂帝から子供を奪い取ると、乱暴にあやし始めた。そんな揺れの中でも、赤子は泣きもしない。不機嫌そうに頬を含ませ、雷震を睨みつけている。
「何があっても、子を助けよと申しました。ルビのことなど、どうでも良い」
それを聞くと樂帝は、頭を抱えて椅子に座り込んだ。雷震があの蛮族の女に骨抜きにされているという噂は、本当のようだ。
「嘆かわしい……、お前の年で、あんな若い蛮族の女に狂うとは」
それにこの子供の痣――。雷震の生母の呪いではあるまいか。樂帝は足元から這い上がって来る恐怖を、押さえることができなかった。
雷震の母である雪蘭（シュエラン）は、侍従の一人との密通が発覚して斬首刑に処せられたことになっいる。が、しかし。実際は、濡れ衣を着せられ侮辱を受けた復讐に、焼身自殺を図ったことを樂帝は知っていた。
議政王大臣の一人であった雪蘭の父と、同じくその一人であった樂帝の父とが友人で、樂帝も子供の頃より雪蘭を姉のように慕っていた。雪蘭が密通などするような性格でないことは、樂帝が一番良く知っていた。何かの陰謀に巻き込まれたのではないか？しかしそのようなこと口してしまえば、自分も斬首刑に処せられ、父も与えられた最高官僚の地位を追われることになる。樂帝にはどうしようもなかった。

猛海との婚姻を承諾したのは、選択の余地などなかったから。猛海の命令に背くことはできない。父の立場もある。それに、幼い雷震には母親が必要だ。樂帝は自ら陰謀の渦に飛び込む気持ちで、王妃の座についた。しかし、その価値はあったのだろうか。目の前で癇癪を起こす雷震の姿を、情けない想いで眺めた。

「俺は、あんな異国の女を王太子妃には迎えたくはなかった。将軍の娘と言えども、ルビは平民の子ではないか！靄妃は、我山族の者。猛虎族と我山族は、元々は同じ民族だ！」

「一顧傾城（チンチャンタン）」

猛海は低く唸った。それは、王が一人の女に狂って、城が傾くという意味だ。

「息子よ。愛妾を正妃のように、扱ってはいない。あの者達は玩具であって、人間ではないのだ」

海龍？？（海龍の嘆き）

ルビを見舞った海龍は、その窶れように言葉なく立ち尽くしていた。ルビの産後の肥立ちが悪いことは奥医者から聞いていたが、ここまで悪いとは……。濃い紫の寝台に埋まるように横たわっているのは、王を、雷震を、男達を圧倒する迫力があったルビだろうか。海龍は気分が優れないのも忘れて跪き、やせ細ったその指先に触れた。

「ルビ王太子妃、お加減は如何ですか？」

「海龍様ですか……」

干涸らびた脣から洩れる言葉を聞き漏らさないように、海龍はできるだけルビの傍に近付いた。気配に気付いたルビが、ゆっくりと目を見開いた。海龍の藍色の衣が、不安に膨らんだルビの心を落ち着かせてくれる。ルビは安心して微笑んだが、口角は引きつったように震えるだけだった。

海龍は金糸や銀糸を使った、華美な衣を好まなかった。藍色の紗に交領（襟）部分と合わせ、裳の裾部分に虎の地織りが施されている絹を足しただけの、王族にしては質素な深衣（シェンイー）だ。しかし王妃より与えられた帯には、金糸で荒波を泳ぐ龍の姿を刺してあった。海龍は派手な部分が気になるらしく、右腕でその部分を隠す癖があった。

「私の子は、何処にいるのです？」

「猛海殿におられますよ。元気な男の子です」

「私はまだ……、我が子の顔を見ていないのです」

「なんと！それは本当ですか？」

決して感情を表に出さない海龍の怒りの声に、侍女達がびくりと体

を震わせた。興奮したせいか、いつもの青白い頬に赤みが差していた。肩を震わせる海龍に、薬湯が必要か太医を呼ぶべきか、侍女達が小声で話しあっている。紫華楼の侍女統領が意を決して、薬湯を海龍の前に高々と差し出した。

「要らぬ！」

そして言い過ぎたと後悔したのか、申し訳なさそうに胸に手を当てて「すまぬ」と頭を垂れた。

「滅相もない！どうか、興奮なさらぬように。お加減が悪くなったら、私共が王妃様に叱られます」

「――分かった」

ルビが子を産んだのは、十五夜月。昨夜の月は二十八月。つまり雷震は、十日以上もルビに子を会わせていないのだ。なんという非情な兄だろうか――。海龍は怒りの余り、体を震わせた。決して遠くない未来、雷震は王位を継ぐだろう。しかし、あのように冷酷な王が、果たして民に愛されるだろうか。民に愛されなければ、国事を行うことは難しい。不安が胃をを焼き、海龍の鳩尾辺りが痛み出した。

「ルビ王太子妃、私が太炎（タイエン）をこちらに連れて参ります」

「太炎が、名ですか？」

「名すらご存知ないのですか？何ということ……」

ルビは虚ろな目で、寝台横の真っ白な睡蓮（リンフォア）の花を眺めていた。ルビと一緒にトルク国から運ばれた睡蓮鉢は、猛虎城と同じ六角の形をしている。六面には、牙を剥く虎、天に昇る龍、水浴びをする白鶴などが描かれていた。睡蓮の花は日の出と共に咲き、日没と共に花

を閉じる。その特徴を利用して、トルク国では時刻の代わりとしても使われている。

「海龍様そろそろ、小夏の祝いが始まるのでは？」

閉じかけた花びらを見たルビが、苦しそうに呟いた。

「はい。ルビ王太子妃、明日必ず太炎を連れて参ります」

ルビは言葉を発する力もなく、瞼を閉じて感謝の気持ちを表した。

日は傾いたと言っても、石畳は昼間の熱気を含ませている。海龍は紫色の扉から出た途端に、軽い眩暈を感じて控えていた狄威（ディウェイ）に体を支えられた。そのまま抱き抱えられるように、馬車に乗り込んだ。頭上で青？蓋（藍色の絹織物制の傘）が大きく開き、海竜は一気に緊張を解く。御者が馬を走らせると、狄威が扇（フウシャン）で海龍の顔を仰ぎ始めた。

「海龍様、今夜の晩宴はお止めになっては如何です？お顔の色が……」

目の前でゆっくりと仰がれる扇は、幼少のおりルビから譲り受けた物だった。それはトルク国にいる、ベロドンという生き物の牙で作られていた。

「全身を灰色の毛で覆われているのですが、太陽に当たると七色に光るのです。鼻は前に突き出していて。口の傍には長い牙があるのですよ」

ルビが右手を自分の高い鼻の前でぶらぶらさせ、その生き物を真似てのしのし歩く姿が可笑しくて堪らなかった。

ルビが猛虎国に嫁いだ時には、海龍はまだ王妃に手を引かれてよちよち歩く子供だった。既に雷震は王と共に戦に出陣する年齢だったので、兄というより父に近い、近寄りがたい存在だった。王は周辺の小国を制圧し、ここ数年は満足している。故に、海龍が物心ついてから、大きな戦は起こってはいない。

雷震と違って病弱な海龍は、この城から出たことがない。特に幼少の頃は、大半を寝台の上で過ごした。そんな海龍の傍で、ルビはトルク国や近隣諸国の様子を話してくれた。ルビのお陰で、海龍は想像の中を走り回ることができたのだ。ルビは大きな口を開けて笑う。猛虎国の女は衣の袖で口を隠すように笑うので、薄気味悪くてしょうがない。子供の海龍は、ルビを姉のように慕っていた。

「可哀想に……」

思わず洩れた言葉に、狄威が頷く。

「恐れながら海龍王太子。雷震王太子は、太炎王太子がお生まれになった際も、朱華楼にいらした程です。ルビ王太子妃が不憫でなりません……。それに、ルビ様はトルク国との和平の証。万が一のことがあれば、猛虎国は諸外国の笑い物になりましょう」

「分かっておる。兄上には、今夜にでも進言しようと思っている」

狄威は残念でならなかった。海龍に人並みの体力があれば……。王としての資質は、雷震より海龍の方があるというのに。長らく仕えて来た狄威は、海龍の慈悲深さ、度量の大きさ、勤勉さ、何より仁義の徳を重んじる人柄を敬愛していた。海龍こそ、この国の王になるべき人物だ。

「皆の者、海龍王太子を、早く中にお運びするのだ」

狄威と数人の従者は猛海殿の正門ではなく、左脇から海龍を中で運び込んだ。正門の両脇には、大理石に牙を剥く虎を彫り込んだ柱がある。しかしそこは、王とその第一王位継承者しか、通ることを許されていなかった。

在麻山艾？（麻の中の蓬）

マァガレは嫌がる海生の髪をまとめ上げ、雷震から贈られた小さな王冠を飾った。それは金の柊の枝に貝細工で作った鳩（クス）がとまっている。金と銅を混合して作った鏡の前で、海生は自分の王冠に触ろうとしてはタウムに窘められていた。

「わぁ、海生様、凄く可愛いですよ」

可愛（プヨン）い、プヨンと、タウムが我山の言葉で賞賛する。城の中では禁止されている我山の言葉を、マァガレの部屋では許していた

マァガレはこの日の為に、海生の衣を縫っていた。短い上着と、腰より下を覆う筒状の衣を合わせた饗宴服だ。交領（襟から合わせ）と袖口、そして裾には、藍色で波の刺繍を施し、腰帯には青と白の芍薬の花、その周りを飛び回る朱色の蝶、芍薬を踏み散らし蝶に飛びかかろうとする虎、それを弓で狙う少女を刺した。

「この女の子は、海生様のようですね」

タウムがその部分を指さすと、海生が両手を叩いてきゃっきゃと笑う。マァガレはそんな海生を抱き上げると、薄い唇に紅を差してやった。

「マァガレ様、その髪飾りだけでございますか？」

「ええ」

マァガレはゆったりと前髪を纏め上げると、一本の長い簪をさした。それは先に楕円形の琥珀がついているだけの、質素な物だった。もちろんその琥珀は、太陽の光を当てると虹色に輝く珍しい品だった

が、華やかな場所には不似合いのように見える。

「マァガレ様、本当にそれだけですか？」

「そうですよ」

タウムは心配だった。今夜の宴は小夏の節句。一部の高官だけではなく、王や王太子の妾妃達、将軍、文武官達の娘も来る。良い夫を見付けようと着飾った年頃の女達の中で、地味なマァガレは霞んでしまうのではないか。もし雷震の寵愛が、他の高貴な娘に移ってしまったら……。戦利品であるマァガレや自分の立場は、一体どうなるのだろうか。タウムは幼いなりに、必死であった。

「金の首飾りはどうでしょう？翡翠の耳坏（アイフォアン）は如何ですか？どちらも雷震王太子から頂戴した高価な品。マァガレ様が身につけたところをご覧になったら、きっとお喜びになります」

「私には、この簪で十分です」

マァガレはそう言うと両手を広げた。タウムは後ろから、若竹色の衣を羽織らせる。少しでも華やかさが増せば良いと、タウムが梔子の白い花と葉を刺繍していた。マァガレは嫌がるが、こっそり梔子の香を焚いて香りを移しておいた。

「この甘い香りは、梔子ですね？」

「はい。梔子の香は甘くて、異国の木の実の香りがすると雷震王太子が仰ってましたよ。マァガレ様からこの香りがしたら、雷震王太子はきっとお喜びになります」

マァガレは、タウムの柔らかい頬を両手で包み込んだ。

「そなたは、何でも覚えているのですね」

「はい」

タウムが得意そうに、顎を上げた。美しい上に賢いタウムは、きっと階位が高い者の寵愛を受けるだろう。しかしこの朱華楼にいる限りは、せいぜい妾妃か、運良く子に恵まれても寵妃が関の山だ。どちらであれ、この朱色の鳥籠の中で、男に飼われて生きるのに変わりない。そのことを考えると、マァガレの胸は締め付けられる。この才を、なんとか生かしてやれないか……。

「さぁマァガレ様、遅れてしまいますよ。表に輿車(リョシャ)が到着しております」

マクレが海生に靴を履かせ、手を引く。マァガレは慌てて、薊(アザミ)の香りがする紅を引いた。

呂彗仁(リョフイレン)は、先程から母の秋香(シュウシャン)と姉の嶺花(リンホア)から「着て」「脱いで」と繰り返され、うんざりしていた。

「母上、私が茶の衣を着ようと、生成を着ようと、どうでも良いではありませんか」

「彗仁、大きな違いですよ。茶はそなたの人柄をとても良く見せるが、賢くは見せない。生成はそなたを賢く見せるが、同時に傲慢に見せる。衣選びは難しい……。こんな時に、父上は何をしているのでしょう」

秋香の父、そして彗仁の祖父である呂智(リョツオン)は、王を助ける高官であり、二人の王太子を教え導く太傅(タイフ)の職にあった。しかし二人の王太子は

成人した為、国境の傍の荒ら屋に住み、一日の大半を近くの小川で釣りをして過ごしていた。今夜は孫の彗仁の大事な日。智に付き添ってくれるように、秋香は前々から書状を送っていたのだった。

「出立の時刻が迫っていると言うのに……」

秋香は歯ぎしりせんばかりに、怒っていた。

「母上、この蓬色の衣は如何でしょう。若草色は彗仁の若者らしい快活さは引き出しますが、“若木に腰掛けるな”と言うように、同時に経験不足な若輩者という印象を与え、軽んじられることでしょう。しかしこの蓬色であれば、“麻の中の蓬”との例えの如くです」

「なるほど！」

秋香は膝を打って、大きく頷いた。

「流石、嶺花！そなたが男であれば、この呂一族も安泰であるのに……」

彗仁は肩を竦めて、姉の顔を眺めた。人々は嶺花を、窈窕淑女と讃えていた。美しいだけではなく、頭も良く、そして淑女であると。しかも、剣や弓の使い手でもある。このような才色兼備であるのに、齢（よわい）二十を超えても独り身を通している。今夜の宴は自分より、嶺花を出席させるべきではないかと彗仁は考えた。そうすれば美しい姉は必ずや誰かの目に止まり、きっと嫁に行くだろう。煩い女二人と暮らすのはうんざりだ。彗仁は恨めしい思いで、頭を振った。

「彗仁、まさかそなた、意味が分からないのですか？」

「――姉上、なんでしょう」

嶺花は大袈裟に溜息を吐いて、説明した。

「蓬というのは曲がりやすい。しかし真っ直ぐ伸びる麻の中に入れれば、蓬も同じく伸びるのです。つまりそなたが、諸兄達に教えを請いたいと願う、謙虚な気持ちの表れとなるのですよ」

「なるほど！流石、姉上です！」

彗仁が背中を丸めて両手を擦ると、嶺花の切れ長の瞳が更に釣り上がった。

「そなたは私を、馬鹿にしているのですか？」

「とんでもない姉上、窈窕淑女と唄われる姉上を馬鹿にするなどと！」

「いいですか、彗仁。宮中に入るのであれば、このことに気を付けるのです。そなたを批判する者がいても、恐れることがありません。しかし誉められた時こそ、注意するのですよ」

「分かっております」

彗仁はそう言うと着ていたの衣を脱ぎ捨てて、亡き父の書斎に逃げ込んだ。その背中を見詰める秋香が呆れて、床に落ちた衣を拾い上げる。

「母上、落胆なさいまな。本当に賢い者は、他人に賢いと思わせぬもの。彗仁は、馬鹿ができる利口者です。必ずや、我が君に重用される筈です」

父？的旨意（父の遺言）

彗仁は先月、齢十五となった。猛虎五代将軍の一人であった父の呂彗忠（リョハイチョン）は戦で受けた古傷が元で、彗仁が物心ついた頃には亡くなっていた。彗仁は祖父より、天文地理、陰陽、仙術、兵法及び布陣を学び、叔父の呂飛竜（リョフェイロン）右将軍より、弓や剣を習った。しかし文武において、姉の嶺花には敵わなかった。

「俺は父上や叔父上のように武官向きではない。かといって、お祖父様のように文官になにもなれない……」

彗仁は未だ、自分の進む道を決めかねていた。ただ、呂家の長男という重責だけが、重く肩にのしかかる。

飛竜からお金の援助を受け、呂家は細々と生活をしていた。戦の功に対して贈られた金や絹織物は、彗忠が気前良く臣下に分け与えてしまい、蓄えは殆どなかった。上の姉二人がそれぞれ校尉や県令などに嫁に行き、その時の結納金などで生活は潤うも、決して豊かとは言えない。

父親の書斎の隅には、竹巻が堆く積み上げられていた。それは、四十数年を戦で費やした彗忠の戦記だった。まだ彗仁が幼いころ、嶺花が父の文字を指で追いながら朗読してくれた。

彗仁はそれを横目で長めながら、深い溜息を吐いた。あの兵法は全て頭に入っている。しかし彗仁が生まれてからは、一度も戦は起こっていない。弓や剣の腕も布陣や兵法の知識も、この平安の世では必要ない。ならば主簿にでもなって、帳簿つけの人生をおくればいいのか。

「あぁ！」

頭を掻きむしりそうになり、慌てて止めた。前髪を頭の上で捻り、香木で創った簪で留めてあった。襟足の髪は長く、背中に垂らしてある。腰まである髪には、母と姉が交互に櫛を入れた為に艶やかに光っている。

「彗仁様、飛竜右将軍と蔡（サイ）福将軍がお見えになりました」

召使いの老婆の、嗄れた声がする。彗仁は更に憂鬱になって、深い溜息を吐いた。蔡巨優（サイジュユウ）は彗仁にとって兄のような存在だった。故に、どうしても嶺花を娶って欲しかった。しかしどうしたことか。巨優が礼を尽くして嫁に貰いたいと申し出ても、嶺花は決して承知しい。

巨優は齢二十を超えたばかりで、福将軍を任じられた。朱色の戦錦に鎧と、銀冠、片手に双戟（槍と長刀の特性を持った武器）を持ち、跨る馬が小さく見えるほどの堂々たる偉丈夫。その姿に、大勢の女達が憧れの視線を送る。しかし、未だに嶺花に思いを寄せているのか、巨優は独り身を通しているのだ。

「嶺花殿は、お元気か？」

門前で中を覗くように聞く巨優に、彗仁は申し訳ない気持ちになって拝礼をした。

「元気にしております。……呼んで参りますか？」

「いやいや、結構」

飛竜について来た五十人ばかりの護衛の前で、巨優は慌てて両手を振った。その時ばかりは鋭い鳳眼が優しく緩み、白く高い頬骨が微かに染る。そして恥ずかしそうに顎髭を弄りながら、控えめに問う

た。

「お元気であれば、なにより。今夜の祝宴に、嶺花殿は出席なさらぬのか？」

「ええ。姉は、華やかな席は性に合わぬと申しまして……。その、蔡副将軍も、姉の気性は良くご存知でしょう？」

巨優はそれには答えず、寂しそうに笑って馬の腹を軽く蹴った。

「全く、お前の姉は、蔡福将軍の何が気に入らないのか？」

飛竜が彗仁の耳元に囁く。

「文武両道。そりゃ、才に於いてはお前の姉には敵わぬかも知れないが……。それでも、見た目も中身も立派な漢（オトコ）だ」

「それは私にも分かっています。しかし、姉と結婚できる男は、剣や弓、才に於いて姉を上回ることは勿論、何よりあの舌に敵う男でないといけないのです。蔡副将軍は、口下手過ぎます。ですから、何度も姉に言い負かされてしまうのです」

「困ったものよ。巨優は一途な男で、他の女には目もくれない。巨優の母上から何度も、嶺花との縁と取り持ってくれるようにと懇願されているのだ」

飛竜はうんざりした顔で、頭を振った。嶺花には良縁が後を絶たない。しかし剣の手合わせ、弓の手合わせ、そして最後の難関である舌合戦で、男達は嶺花に完敗してしまうのだ。

「父の遺言です。剣、弓、才が私より勝る男へ嫁に行くようにと。私は父の遺言に従います。例え叔父上も、父の遺言を破れと命じることはできない筈」

そう言われてしまっては、飛竜にも返す言葉がない。

「それにしても、女にしておくのが惜しいのう」

「全くです」

大きく頷くと、後方より彗仁を呼ぶ声がした。輿車から顔を出して手を振る、祖父の智が見える。

「父上か。護衛もつけないで、なんと暢気な」

飛竜が肩を竦めて輿車目掛けて馬を走らせ、彗仁も後に続いた。

?藏王太子（隠された王太子）

智は、馬一頭に引かせた質素な輿車に乗っていた。勿論お付きの者は、御者一人だ。泰安の世であると言っても、智が住む国境には山賊などが潜んでいるというのに。

「父上、不用心過ぎます！」

「飛竜、そう怒るな。このような質素な輿車、山賊でさえ襲いはせぬ」

白い髭を撫でながら、ゆったりと反論する。

「父上、約束の時刻はとうに過ぎております」

「しょうがないであろう。そなたらのと違って、年老いた駄馬なんだから」

それにしても彗仁よと、智は孫の晴れ姿を目を細めて眺めた。

「その衣の色はなかなかじゃ。母に選んで貰ったのか？」

「いえ、姉上です」

「嶺花か」

智は満足そうに何度も頷くと、輿車の中に消えた。

「やれやれ」

飛竜は呆れた顔で、列の先頭に戻って行った。彗仁はその後を追わず、輿車に歩調を合わせて併走した。祖父に尋ねたいことがあったのだ。

「お祖父様。今夜叔父上は私を、城の高官に引き合わせようとしています。恐らく、軍の最高位である大都督と、内政の最高位の丞相です」
「そこで、そなたを重用するように願うのか」
「おそらく……」
「何故、飛竜の軍に入らないのだ？飛竜は国境の虎尾郡（フウウェイ）を任されている太守、虎尾公でもある。そなたに仕事を与えるくらい、簡単であろう」
「母上が、宮中での仕事を望むからです。虎尾は、国の最北端に位置します。母は私を、辺境の地にやりたくないようです」
「――なるほど」

彗仁はそこで黙りこんだ。静かになった孫を心配して、智がそっと布帛（フハク）を捲って、様子を見る。彗仁は遠くに見え始めた猛虎城の関門を、真っ直ぐに見据えていた。

「さて、彗仁よ。お前は何を成したいのだ？父のように戦で功を上げたいのか？」
「何を、成したい？」

彗仁は、智の問いに首を傾げた。今まで、出仕することだけ考えていた。問題は、どんな役目につくかではなく、男として何を成し遂げたいか――。

「お祖父様。この泰平の世にあって、何かを成し遂げることは簡単ではありません」
「そうか？大業というのは、混乱の中でどさくさに紛れて行うものではないぞ」
「それはそうですが……」

「それに、この平安の世がいつまで続くのやら――」
「え、それはどういう意味ですか？」
智は高らかに笑うと、さらりを布帛を戻して黙りこんだ。彗仁は途端に不安に押し潰されそうになった。やはり嶺花に付き添って貰えば良かったなどと、甘い気持ちが首をもたげる。振り返ると、我が家のある鳳凰の丘が見えた。
――鳳凰は梧桐（青桐）にしか留まらないと言う。
「梧桐に留まり、竹実を食い、醴泉を飲む」
彗仁の家は梧桐と竹に囲まれ、清らかな滝が流れる傍にある。故に人々は、「鳳凰の丘」と呼んだ。彗仁は我が家より少し離れただけなのに、既に口煩い姉や母が恋しい。
「おい、彗仁どうしたんだ。そんな寂しげな顔をして」
巨優に手招きをされて、彗仁は慌てて先頭に馬を走らせた。
智は蒸し暑い輿車の中で団扇を仰いでいたが、ふとその絵柄を見て考え込んだ。それは持ち手が翡翠、絹本に鳳凰が描いてある。鳳凰は、王の子供を意味している。雷震が生まれ、智が師傅に任じられた年に王より賜った。あれから、四十年の月日が流れていた。
「――解せない」
数日前、智がいつものように、川辺で釣り糸を垂らしている時だった。通りかかった旅人と話しが弾んで、茶を煮て酌み交わすこととなった。
旅人はお付きの少年二人に荷車を引かせて、各地を放浪している

と言う。しかしその割には、立派な身なりをしていた。名を姜玲（カンリ）と言い、聞けば、猛虎城にも出入りを許されている商業都市シデートの商人だという。流石に話題も豊富で、城の中の噂を智に色々と聞かせてくれた。

「王太子に御嫡男が誕生したと言う噂を聞いて、私は喜んで注文を取りに城に出向いたんです」

「王太子と言うと、雷震様に？」

「ええ、齢四十に届く王太子妃に御嫡男が誕生したなれば、きっと盛大な祝宴になるだろうと思ったのですが……」

当てが外れましたと、首筋に堪った汗を拭きながらは玲は嘆いた。

「確かに、ルビ王太子妃ご懐妊については、隠棲の身である私の耳にも届いていました。しかし誕生の知らせは、未だ来ておらぬ」

智は齢七十に届く高齢だが、王太子二人の師傅を努めたことで太傅に任じられ、王族への影響力は衰えていないと自負していた。城から知らせが来ないのはおかしい。それに、もしそうであれば、飛竜が真っ先に知らせてくるだろう。

「公にできない理由が、おありのようなです」

商人は声を潜めて、そう続けた。城内の太医達へも薬草を卸していると前置きして、商人は核心を告げる。

「はっきりとは仰りませんでしたが、御嫡男には公にできない病のご様子」

「病？」

「しかし、それなのに。太医府からは、薬草の注文すらありません」

商人は暫くその話しを続けたが、商売人らしい柔らかい物腰で茶の礼を述べると去って行った。

「解せぬな……」

?兵的忠誠度（歩兵の忠誠心）

目の前に紫色に腫れた乳房を突き出されると、太炎は低い唸り声を上げてそれに吸い付いた。生まれて丸一日も乳を与えられていないのに、空腹を訴えるたった一つの手段、泣くことをしない。代わる代わる自分を見下ろす大人達を、絹の産着に包まれながら睨み付けている。

「何事にも動じない。生まれながらにして、王の風格がおありになる」

太医達は猛海の顔色を窺いながら、背中を丸めて卑屈な笑みを浮かべた。

「泣きもしないとは、どういうことだ？」

猛海は太炎の頬を抓りながら、太医の顔を睨み付けた。

「私達も、このようなことは初めてでして」

「何かの呪いにかけられているのか？例えば、西落国（シールア）の。太卜（タイボク）の沈（チャン）山（シャン）は何と言っている？」

太卜とは、占いを行う役職のことである。竹の棒、太陽や月、トカゲ、亀を用いて未来を占う。太炎が生まれた夜のこと、「妖星（流れ星）が現れた。凶事の前兆である」と、沈が報告して来たことを、猛海は思い出していた。

戦に明け暮れていた日々、猛海は常に沈を傍において戦況を占わせた。確かに、沈の占いは良く当たった。

猛海は齢十九で即位した。先君に仕えた老将達は百戦錬磨の猛将

であり、猛海の戦術を鼻で嘲笑う。そこで猛海は、老将達の迷信深さにつけ込んだ。自分の戦術、兵法に説得力を持たせる為に、沈の占いを利用したのだ。沈は、夜空を見上げ、亀を転がして見せ、吉凶の見地から老将達に出陣の期を説いた。その期は常に、猛海と一致していた。

しかし、泰平の世になり二十年近く。沈山は引き続き太卜の職にあったが、如何なる進言も猛海は聞き入れなくなった。その必要が、なくなったからである。

猛海は気付いていた。沈が易の見地から老将達を必死に説得したのは、それが猛海の為だからではない。それはたまたま沈の占いの結果が、猛海と一致していたからだった。

「沈を、ここに呼んで参れ」

側仕いは甲高い返事をすると、脱兎のごとく部屋から飛び出して行った。

太炎に乳を与える女は、周りを囲む王族と高官達の前で縮み上がっていた。齢十八、一歩兵の妻である。二十日程前に、生まれて直ぐの子を病で亡くしてしまった。名を小桃（シャオタオ）と言う。

小桃は太炎の乳母を任じられ、夫の丁剛栄（ディンガンロン）は妻を猛虎殿に軟禁する罪滅ぼしに、歩兵隊長に封じられた。

小桃は農民の娘で、その健康な体以外は何の取り柄もない。勿論、ちゃんとした教育を受けていない。太尉である臥慈智（ファツウジ）は、その点を評価し、乳母にと推挙した。王太子を楯にとって、策略を巡らせるような女、野心を持った夫や家族を持っていては困るのだ。

慈智は自ら小桃の夫、剛栄に会い、王への揺るぎない忠誠心を確かめた。剛栄は戦で功を立てて、名を成したいという思いが強かった。しかしそれは、自らの立身出世の為ではなく、王の為に働きた

いという気持ちからだった。剛栄の亡くなった父もやはり歩兵で、死ぬ間際まで戦で勇敢に戦ったことを語っていたからだ。

「我が君の為ながら、某（それがし）、命も投げ出す所存でございます」

目の前で拝礼をする剛栄に、慈智は「楽にするように」と声を掛けた。しかしそう言われても、剛栄はなかなか顔を上げない。

「どうかしたか？」

「某は一歩兵の身、太尉様のような方にお目通り叶うとは感激の至り。とても、面を上げることができませぬ」

武雄殿の磨き上げられた大理石の上に跪き、拝礼の姿勢のまま動こうとしない。剛栄は筒袖鎧（とうしゅうがい）と呼ばれる金属の札を魚の鱗のように重ねた鎧を着込んでいた。しかしそれは、随分使い古されて見えた。上官が使い古した物が、下へ下へとくだり、最後に歩兵へ辿り着くのだ。

「良いから楽にするのだ。今日はそなたに、頼みがあって参ったのだ」

「頼み？」

剛栄はそこでやっと顔を上げたが、慈智の視線に会うと、また慌てて額を床に擦り付ける。

剛栄が恐縮するのは当然だった。慈智の位は大尉である。文官に属する役職ではあるが、職務は主に軍事に関わること。階位としては、丞相の次に高い身分となる。一歩兵にとっては、神のような存在である。それに慈智は齢二十七、漆黒の長い髪を腰まで垂らし香木で創った冠を乗せ、生成の目映い衣を羽織っていた。薄汚く

粗野な武官達とは違うその高貴な姿に、剛栄は一瞬で己の薄汚さを恥じた。それに女達が噂するに、宮中一の美男だとか。そんな慈智が、自分に頼みがあると言う。剛栄は意を決して、恐る恐る顔を上げた。慈智は困ったような笑顔で牀几(しょうぎ)に腰掛け、剛栄を見下ろしていた。

「そう、縮こまるでない」

慌てて髭を剃って来たのか、まだ少年らしさが残る頬に切り傷が幾つもある。剛栄は凛々しい眉と、大きく輝く瞳をしていた。なかなか良い顔相をしていると、慈智は思った。

「そなたは最近、子を亡くしたそうだの」

「はい……」

「それは辛かったであろうな。して、そなたの奥方はどのようにしておる」

「は、小桃でございますか？」

「実はな、丁剛栄よ。小桃を、ある高貴な生まれの方の乳母に推挙したいのじゃが、どう思うか？」

「高貴な生まれの方……」

敢えて濁したその部分を、剛栄は真っ向から切り込んで来た。

「大尉様みずから乳母を捜されるような高貴な方と言ったら、この宮中にお一人だけでしょう」

ほう、そこで慈智は嬉しそうに膝を打った。

「そなた、察しが良いの」

「はっ、恐れ入ります」

「で、そなた、どう思う？」
「光栄なことと存知ます。が、しかし。小桃は農家の出です。宮中の礼儀作法も存じません。その、皆様方に、無礼があるのではと……。それが心配です」
「礼儀など大目に見る。それよりも大事なのは、二つじゃ。口が堅いことと、乳の出じゃ」
「――その二つであれば、大尉様のご期待に添えるかと。もし、大尉様のご期待に添えぬ時には、某がこの刀で切り捨てます！」
腰に佩(は)いている剣に手を伸ばす。
「まぁまぁ、待て。話はまだ続きがある。そなたの妻は猛虎殿で、ある方の乳母に任じられる。その為、そなたとは暫く離れて暮らすことになる。その罪滅ぼしではないが、そなたを歩兵隊長に任じ、絹二十反と銀三百を遣わす。また当然、歩兵隊長の禄も与えられる」
しかし剛栄は慌てて、絹と銀は貰えぬと言う。
「歩兵隊長に任じて頂き、禄を頂戴できるだけでも身に余る光栄です。これ以上、絹や銀など頂戴できませぬ。断じて、できませぬ」
「これは、我が君からのお心遣いである。そなたは、それを受け取れぬと言うのか？」
「某は歩兵となり数年、訓練を積んで参りました。しかし実際に戦に出陣し、我が君の為に働いたことは一度もありませぬ。無駄飯食らいの歩兵が、絹や銀をどの面下げて頂けましょうや。臣下が主君の為に忠義を尽くすのは、金銀は欲しいからではありませぬ。少なくとも、某は違います」
慈智は驚いた。このようにまだ、主君に忠義を貫く臣下がいたとは。口を一文字に結ぶ剛栄の決心を変えるのは、難しそうだ。そう考え

た慈智は、戦法を変えた。

「そなたには、老母がおられるのぉ。聞けば、荒れ地に一人で暮らしてらっしゃるとか。どうだ、城郭内に家を持ちそこで親孝行をしては。家はこちらで用意する。しかし家を構えるとなれば、色々物入りである。それにこの絹はそなたではなく、母上に贈られた物だ。そなたが勝手に断るのは、可笑しいであろう」

「母上に？」

剛栄の頭に、背中の丸まった母が土間で草鞋を編む姿が浮かんだ。年老いた母が草鞋を売り歩く姿を見る度、胸が締め付けられる。

「老母に孝行はしたくないのか」

「――したいです」

「では、存分にしてやれば良いではないか」

「はっ」

剛栄はまた床に頭を擦り付け、慈智に三度拝礼した。

「感謝いたします」

小桃混亂（小桃の戸惑い）

薄汚れた小桃を風呂に入れ、固まった髪をとき、また薄桃色の衣に手を通させると、その名の通り瑞々しい果実のような女となった。ふっくらと膨らんだ頬は若々しく、大きな瞳は陽気な人柄が表れている。

「小桃が、我が君に拝謁いたします」

慈智が教え込んだ通りに、小桃はなんとか拝謁を終えた。

「ここで知り得たことは、他言無用である」

丞相の曹寧（ツァオニィン）に詰め寄られて、小桃はぐっと押し黙り頷いた。曹は小柄だったが、顔中を剛毛で覆われており、目は常に注意深く回りを警戒している野獣のようだった。

「ではさっそくだが、太炎王太子に乳をやってくれ」

「は、はい」

小桃は頷いて太炎を抱き上げた。太炎はまた別の大人が来たかと、その人の良さそうな笑顔すら睨み付ける。怒りに顔が赤くなると、例の痣がより濃く浮かび上がる。小桃は恐ろしさにきつく目を閉じたままで、太炎の口に乳を押し付けた。

「それにしても我が君、太炎様の誕生をいつ発表なさいますか」

大都督の宰道明（ザイダオミン）が地を這うような声で聞いた。宰は背が九尺あまり、軍の中においても一際目立つ体躯をしている。

「お世継ぎの誕生は、猛虎国安泰を諸外国に知らしめることとなります。戦の世が過ぎ、早二十年近く。猛虎国が平定した周辺小国が、強兵富国に勤めるに十分に足りる年数です。西落国と、我山族、平原の蒙元（マンヤン）国、今は大人しく猛虎に従っておりますが、国を荒らされ主君を殺されたことは忘れてはいない筈。猛虎に隙あらば、恨みはらさんと結託して襲って来るでしょう」

「隙、とは何ぞや」

「恐れながら、我が君。正統な王位継承者がおらぬと、国は必ず乱れます。それぞれが、それぞれの思惑で、それぞれに王位につくべき人物を担ぎ、愚かな争いが起こります。故に、太炎様のご誕生を早く発表すべきです」

「海生がいるじゃないか」

ことの次第を不機嫌そうな顔で眺めていた雷震が、初めて口を開いた。

「恐れながら、海生様には我山の血が流れています……。それに」

宰はそこまで言って、口を噤んだ。

「それに、なんだ？　靄妃が猛虎に来た時には、我山の男の種を宿していたと言う流言を、大都督は信じているのではあるまいな！」

宰はそれには答えずに、丞相に目配せをした。雷震がマァガレに入れあげているのは、宮中の者なら誰でも知っている。二人の高官は、互いに呆れた顔で肩を竦めた。

「臥大尉、そなたはどう考える？」

困った猛海は、慈智の知恵に縋った。慈智の聡明さは、臣下の中でも軍を抜いている。太傅の呂智が推挙してから、若干二十五で大尉を任じられた。

「恐れながら、我が君。太炎様のご誕生を何の策もなく発表すれば、諸外国の無用な邪推の元となりましょう」

「邪推とは、なんだ？」

「先ほど、我が君が沈太卜を呼びにやられたのは、火神を崇拝する西落国の呪いではないかとお考えになられたからではないですか？」

西落は、国の中央に巨大な聖火台を据え火を絶やさない、火神崇拝国だった。火が神の後光と同じと考え、尊び奉ったのだ。その為、西落国の少数民族は、火を自在に扱う力を備えており、猛虎兵は苦戦を強いられた。

しかし慈智の父、慈元（ツウイエン）の策により、西落国の傍を流れる川を堰き止め、大洪水をおこし水攻めを行った。そして、全ての火は消えてしまった。

水が引き、まだ幼い西落国の王子が投降してくると、猛海は聖火台に点火し、燃えさかる炎の中に王子を無情にも投げ入れた。

「西落国を落とすのに、猛虎の兵が大勢犠牲になった。王子を焼き、その御霊を鎮めるのだ！」

西落の女達の悲鳴と家臣達の低い泣き声が響く中、猛海はそう叫ぶと狂ったように笑い続けた。慈智は父より、その地獄のような光景を何度も聞かされた。そして、今度そのような惨劇を目の前にしたら、命を捨てる覚悟でお諫めしろと。慈智の父は死ぬまで、諫言できなかった自分を恥じ、苦しんでいるようだった。

「確かに今となってみれば、あれは惨いことをした。西落国に恨まれても、しようがないと思う。しかし余も、家臣を大勢亡くして苦しかったのだ。ああでもせねば、腹が納まらなかったのだ。」
「つまり、我が君と同様に考える国もあるということです。猛虎に西落国の呪いがかかった王太子が誕生したとの流言が広まれば、それこそ大都督の仰るように、我が国の隙となりましょう」
「ではそちには、何か策があるのか？」

慈智は余裕の笑顔で頷いが、申し訳なさそうに頭を掻いた。

「我が君、ひいてはこの猛虎殿の一部を焼きますが、お許し頂けますか？」
「一部を焼くだと？」

王は慈智を怒鳴り飛ばそうと息を吸い込んだが、思い直して大声で笑い出した。

「太炎の為になるなら、この猛虎殿。一部と言わず、全部燃やしてもかまわん！」

笑いの波紋が、丞相と、大都督に広がる。しかし雷震だけが渋い顔で、慈智の顔に指を突きつけた。

「そなた、失敗したら、只では済まないからな！」
「失敗したならこの首を、雷震王太子に差し上げます」
「その言葉、忘れるなよ！」

言い捨てると、大股で部屋から出て行く。その気性の荒さ、激しさ、堪え性のなさ、何より我山の女に骨抜きにされている様を見る度、臣下は不安になっている。老臣の中には、雷震が王位を継いだら隠

居すると言い出す者もいる程だ。

「で、臥大尉、策はいつ行う」

「小夏の節句の祝いの晩に、実行いたします」

曹？嘲笑（曹寧嘲笑う）

齢　六十を超えた沈は、慌てて跪き、荒い息を吐きながら律儀に三度の拝礼を行った。

「我が君に、沈山が拝謁致します」

「おお、大儀であった。しかし、すまぬ。もう臥大尉が解決してくれた」

「はっ」

沈の容貌は不気味だった。大半白髪になった髪を纏めるでもなく垂らし、他人とは違う何かを見詰めるような、異様な目をしていた。しかし人々が沈を恐れるのは、その容貌のせいだけではなかった。その表情だ。喜怒哀楽のどれにも属さない、何かに取り憑かれたような呆けた顔。そこからは、沈の本心は見えない。故に、妖怪（妖怪）などと、陰口をたたかれている。

「臥大尉はいつから、占いをなさるようになったのですか？」

「いやいや」

宮中一の美男子と呼ばれる慈智が、優雅に首を振った。

「軍事を司る大尉たる者、兵法や布陣だけでなく、天文地理、仙術、陰陽に明るくなければ、凡才の極み」

「流石、権謀術数と噂される、臥大尉でございますな。敬服致しました」

「恐れ入ります」

男の沈でさえ色気を感じる仕草で、慈智が拝礼をした。慈智が動く

度に、濃厚な香りがする。噂では、胸元に鏡袋を忍ばせ、その中に麝香を入れているのだとか。このような若輩の洒落者が大尉に封じられ、王に重用されているとは。沈は苦々しい思いで、慈智を眺めた。

慈智は常に笑顔を絶やさず、感情的になることがない。故に、本心が見えないなどど、警戒する者もいる。沈も慈智も、たやすく本心を見せない点で似通っていた。

「しかし、沈太卜。易径に関しては、私は沈太卜に叶いませぬ。折角、このように我が君に拝謁が叶ったのですから、この猛虎国の行く末を占って差し上げたら如何か？」

「実は昨夜、妙な胸騒ぎがしまして、調べて参りました」

「ほう、言うてみよ」

猛虎に促されると沈はまた拝礼をし、そのままの姿勢で厳かに告げた。

「忌星が来年早々現れます。史紀によれば、七十六年毎に忌星は現れるとあります。先君の時代には、忌星先出東方見北方五月見西（忌星が東から北、五月になったら西に見えた）、忌星復見西方十六日太后死（その後忌星は西に十六日間見え、皇后が死んだ）蝗蟲從東方來蔽天天下疫（東から飛んで来た蝗が天を覆い、疫病が蔓延した）とあります」

「――うむ。その話は、先君から聞いたことがある。まだ小国だった猛虎は、飢饉と疫病に苦しんだと」

「なんと、それが来年か！」

宰は顔色を変えたが、曹は皮肉な笑みを口の端にぶら下げて顎髭を撫でた。そもそも曹は、易経、易学など信じていなかった。自然が運命を予知するなどと、曹にはどうしても思えなかった。神を初め

人智を超えた存在に縋り、またそれに恐れを抱く人間は、殆どが敗者だと考えていた。
曹寧の父である、曹直（ツァオチィ）は中侍府で、中常侍（ちゅうじょうじ）を任じられていた。中常侍とは王の側近、つまり王直属の機関で、宮中内のあらゆる諸事を司っている。その昔は、宦官が就く仕事であった。しかし先々代の時代に、刑罰としての去勢が行われるようになってから、この宦官制度は無くなった。
曹直は右中常侍だった。王の身の回りの品を手配することも仕事であり、その為、商人からの誘惑も多かった。しかし元来、生真面目な性格の曹直は、その手の誘惑を一切はねつけていた。それが災いしたのだと、寧は母の翡玉（フェイユ）より聞かされた。

「そなたの父を煙たがる者達の策略に、填ってしまったのです」

曹直は身に覚えのない、宮中の金銀で私腹を肥やしたという罪で投獄され、そのまま獄中にて病死した。
幼かった寧は寝台の下で、父親が衛兵に絡め捕らわれる姿を見ていた。城郭内の家を追われ、翡玉に手を引かれ畦道を何里も何里も歩いたことを寧は今でも覚えている。ふと見上げると、翡玉が声も上げずに泣いていた。おもわず振り返ると、猛虎城の女墻（じょしょう）が見える。言いようのない悲しさが込み上げ、寧は母に縋り付いた。

「母上、沓（くつ）が痛い。早くお家に帰りましょう」
「こら、寧！振り向いてはいけません、もう二度とあそこには戻れぬのです」

それから数年、寧が齢十二になるまで、翡玉の遠縁を転々とし、こうして歩く日々が続いた。
寧の運命が変わったのは、母が中央文官では一番階位の低い、蘭台令史の年寄り、馬天雲（マチェンユェン）と再婚すると決まってからだった。蘭台

令史は奏上文（王への意見書）や公文書をしたためる役、つまり文字が美しい者が就く職であった。
　天雲と翡玉の母は、三十歳の開きがあった。まだ若い翡玉が年寄りに抱かれるおぞましさに、寧は毎晩震えた。そして母のその覚悟が、他ならぬ寧の為であることが嫌で嫌でならなかった。何故母は、女は、嫌な男に抱かれながら、あのような悲鳴を上げるのだろうか。寧は寝台の中で、歯ぎしりしながら涙を流した。母が憎かった。義父が憎かった。宮中の者達が憎かった。
　寧、十五の年に、天雲の推挙により、蘭台令史の補佐として出仕した。天雲には息子がおらず、また翡玉に大層惚れ込んでいた。故に、全家督を寧に譲り、早々に隠居することを決めたのだ。
　それから三十年、寧は丞相の階位に上り、忌々しい「馬」の姓を捨て曹寧に戻った。三十年間、寧は自分だけを信じて生きて来た。勿論、広大な自然の力の前では、豪傑な英雄でさえ小さい存在であると理解している。しかし、月蝕や日蝕などの星の動きで語られる運命学には、どうしても違和感があった。

――くだらない。寧は心の中で悪態を吐いた。

俺の運命は、星や月ですら暗示できる訳がない。思わず口元が歪み、寧はそれを誤魔化すように顎髭を何度も撫でた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2589w/

炎帝と処女王

2011年10月13日03時53分発行